

私たちの底力を信じよう

この初夏、東北新幹線の車窓に流れる光景は、一見、東日本大震災前と変わるところがなかった。緑豊かな畑地には粛々と耕運機を動かす人々が散開し、灌木の隧道を抜けるとモダンな工場群が現れる。従前と同じ平和な時間が過ぎていく。

だが福島県に入ると雰囲気が変わった。瓦屋根を修理する家々が目につき、ロープが張り巡らされて人の出入りを拒んでいる建物も少なくない。さらに北上して盛岡駅に到着。周囲は平常な佇まいだが、岩手県庁の空気は張りつめていた。庁舎を行き交う職員は物静かで、知事や副知事をはじめ、県幹部も寡黙に業務に精励されている。この人たちの顔には、待ったなしの決断を迫られ同時並行の危機処理に対峙する人間だけが持つ、自若として透明な表情が浮かんでいた。岩手県の復興プラン策定のお手伝いにやって来た筆者には、大災害への心からの哀悼とともに、抑えきれない躍動感が湧き上がっていた。

東日本大震災から何を教訓とすべきか。まずは、自然災害は「防ぐ」ものか、「避ける」ものか、を真剣に考えなければなるまい。今次の大災害では、現代人のほとんどが夢想だにできなかった凶暴な津波が沿岸市町村を蹂躪し尽くした。ギネスブック級の頑丈な巨大堤防も、小山のような海水の奔流を前に脆くも崩れ去った。安全と信じら

れ人間生活を豊かにしてきた原子力発電所は、鉄槌に打たれた豆腐と見まがう脆さだった。

さりとして、自然の力を虚心に受け止めながらも人類は発展していかなければならない。その時、自然災害に対して真正面から防御しようとするのか、「三十六計逃げるに如かず」を決め込むのか。解はこの両極端のどこかにあるはずだが、その際には東日本大震災の徹底的な検証と過去の教訓を再三精査する必要がある。

次に情報開示とそのスピードのあり方だ。原則論からいえば、正確で十分な情報を迅速に、ということになる。今回の災害後の情報開示に関しては、さまざまな指摘がなされている。当然、将来への教訓として生かさなければならぬが、平時と危機時の情報開示の異同についても検討しておくべきだと思う。

さらに報道のスタイルにも一石を投じている。被災地には、外見は深刻でないものの、実は倒壊寸前で使用に堪えない建物が並ぶ町並みが少なくない。にもかかわらず、報道では衝撃的な「絵」ばかりを多用しがちな傾向がなかったか。一見、軽症に感じられても重篤な地域があまた存在するのである。象徴的なシーンだけではなく、より巨視的な視座の報道がもっとほしかったと感じている。

深刻な教訓の一つは、海外における情報の錯綜混乱も手伝い、遅れがちに見えた諸対応が、対外的に日本のブランドイメージを大きく傷つけてしまったことである。こうした状況が長引くにつれ、「穏やかだが芯が強い日本人」という好イメージが「何も言えない情けない日本人」へと悪化してしまった。

しかし、これら数々の教訓の半面で、日本の将来に大きな希望を持てる要素は多くある。

何といても、民間の素早い復旧ぶりである。大災害直後は、大半の被災関連企業は秋口まで立ち上がれまい、と懸念されていたものだが、どっこい日本企業の復元力は半端なものではなかった。粉碎された工場を短時日のうちに操業可能なまでに修繕し、寸断されたサプライチェーンの復旧も驚異的な速さであった。平時はライバル関係にある企業同士が一致協力し、激災企業へは業態を超えた支援の輪が広がった。危機に臨んだ「民」の強さは健在だったのである。

また、被災自治体の逞しさにも瞠目している。大混乱と惨劇の中では絶望感にとらわれるのが人間の常であろうが、関係自治体は総じて常ならぬ動きを示している。冒頭に紹介した岩手県などは、現場の状況にしなやかに対応しつつ、中長期的なビジョンの具現化にも力を注いでいる。被災者の方々の心の支えになり得る理念の謳い上げも迅速だった。

いわゆる民度の高さも再評価してよい。被災地へのボランティアや義援金が引きも切らなかったことは周知のとおりだが、全国の若い世代のひたむきな心は、落ち込みがちな日本に大きな元気を与えてくれた。大震災当日の東京で、溢れんばか

りの帰宅の人混みに居合わせた中国人の友人が感嘆していた。「就職活動中の大学生たちが『会社訪問は中止して1年間東北で復興のお手伝いをしよう』と話していました。高校生三人組は『若い自分たちの頑張りが日本を救う』と冴えた顔色で断言していました」

思えば遠い昔から、日本人は危機をバネにして時代を切り開いてきた。平安時代の後半は、平安どころではない外からの脅威と内なる混乱に晒され、室町時代も中央政府が脆弱で国は麻のように乱れた。江戸末期の国家的な危機、関東大震災後の苦難は周知のとおりである。日本人の父祖はそのいずれをも克服して時代の黎明を切り開いてきた。近くは、第二次大戦後の荒廃とオイル・ショックを乗り越え、新しいステージに適応してきた。

経済に「数字」は必須だが、それ以上に大切な要素が人間の「心」だ。経済活動は数字で語られるものの、その主体は無機的なマシンではなく感情が支配するヒトである。過剰な精神論は禁物だが、適度な感情の高揚は復興にとって有意義だと思う。こうしている間にも日本は着実に再興している。

そう。私たちの底力を信じよう。

[著者]

川村 雄介 (かわむら ゆうすけ)



専務理事